

事務局だより

会員数（2025年5月1日現在）

湘南	県央	ベイサイド	多摩・田園	計
40	30	29	29	128名（Eグループ会員：116名）

入会 2名 小林 靖典氏（県央）、中村 幹夫氏（多摩・田園）

退会 1名 舟田 隆氏（ベイサイド）

第34回通常総会を対面で開催

2025年5月25日（日）、第34回通常総会をオルタ館にて対面で開催しました。当日の出席は21名、議長委任16名、議決権行使54名。出席・委任・議決権行使を合わせた数は91名でした。これは会員総数の約70%に相当します。ありがとうございました。

総会議事録は出来上がり次第発表します。



議決権行使結果

議決権行使結果は以下の通りです。賛成多数にて全議案は承認されました。

議案	議案名	賛	白票	会場での賛否
第1号	2024年度活動報告	53	1	賛成多数
第2号	2024年度決算報告および監査報告	53	1	賛成多数
第3号	2025年度活動方針および活動計画	53	1	賛成多数
第4号	2025年度予算案	53	1	賛成多数
第5号	会則改定案	53	1	賛成多数
第5号	2025年度役員選出案	53	1	賛成多数

2025年度の代表、副代表、会計

当日、会則第10条に基づき、新運営委員の互選によって、代表が大澤委員（ベイサイド）、副代表が竹内委員（多摩・田園）、会計が増子委員（ベイサイド）に決定しました。これ以外の役割分担などは、後日臨時運営委員会にて協議する予定です。今回の総会をもって石井委員（多摩・田園）と福山委員（県央）が退任、加藤委員（県央）が加わりました。退任された方々、ありがとうございました。

総会後の懇親会～地域を超えた交流～

懇親会には、20名の参加がありました。じゃおクラブ創設メンバーであるベイサイドの率川さんの挨拶と、湘南の島村さんの音頭による乾杯でスタートしました。

今回はベイサイドの増子さんが司会を担当され、地域じゃおを超えた交流が活発になるようにと、それぞれの地域が最近のトピックスを紹介しました。

湘南は、昨年度から「藤沢歴史散策」と銘打って、藤沢市を中心とした街歩きを始めたそうです。今年度の第1回は6月10日の大潮の日に、「トンボロ現象」で地続



きになった片瀬海岸から江ノ島まで歩いて渡り、さらに江ノ島の島内を散策する企画があるとのこと。また、俳句の会「四木会」は合同句集「四木」第五巻を刊行したそうです。

県央は、人気の蕎麦打ちを続けており、多摩・田園の浅野さん、小俣さん、山本さんの指導を受けて上達を目指しています。「明るく、楽しく、元気よく」を合言葉に活動に取り組んでいます。ピンポンクラブや上河内ファームのほか、てくてくウォークなども継続中です。

ベイサイドは、健康マージャン（クラブ已申）が活発に活動しているほか、ベイサイドウォークやワインの会の企画が続いています。率川さんをリーダーに、年2回の工作教室に参加していますが、もう一回増えるかもしれないとのこと。今後が楽しみです。



多摩・田園は、健康テニスの参加者が多いのですが、最近は怪我人が出て、人数が減り気味。それでも元気に続けています。「仲間と街歩き」では6月13日に、あじさい咲く白山神社から八百屋お七ゆかりの寺社を歩くガイドツアーを計画中。まだ若干名の参加が可能だそうです。さらに7月5日は相模大野で行われるクラシック・コンサートの演奏会もあります。

「大人の遊び場」は、地主さんのご厚意で、少し耕作面積が広がり、昼食をとりながらの「おしゃべりの会」が続いています。

行事はサークルスクエアで公表されています。所属する地域に関係なく、どの地域が主催する活動にでも参加できるのがじゃおクラブの特徴。皆様の積極的なご参加で活動が広がればと願っています。

この日の最後は、今回で運営委員を退任となった石井さんの「十締め」（とうじめ）で賑やかに終わりました。（副代表 竹内 純一 記・写真）

次回の運営委員会と HP サークル

臨時運営委員会 日時：2025年6月22日（日）10:00～11:45 運営委員の役割分担の協議
議長：増子委員 書記：宮越委員 対面開催：オルタ館 201 会議室

HP サークル 日時：2025年8月10日（日）15:30～17:00 オンライン開催 議長：竹内委員

会員だより

脳が長持ちする「おはなしの会」をめざして

多摩・田園 高橋 孝

「大人の遊び場」を担当して7年目になりました。「野菜作り」と「おはなしの会」で半日を日差しのもとで過ごし、健康維持に努めていますが、せっかくなので「おはなしの会」のバージョンアップをめざしたいと思っています。昨年12月に出版された「脳が長持ちする会話」(著者 大武美保子)で推奨された、「最近(1ヶ月以内)の出来事を話題にする」に取り組んでみます。

- ・ 「最近の話」ができるのは
 - ①覚える、②覚えておいて、③思い出す、この三つの記憶プロセスが回せる
 - ・ 新しい体験を「誰かに話そう」と意識すると
脳の「体験記憶」機能が活性化される
 - ・ 「新しい体験を覚える」ことを意識しているだけで
脳内のネットワークが強化される
- とのことです。



今井谷戸の農園は地主さん都合で資材置き場を移動しましたが、代替地を頂いたことから耕作スペースは1.5倍に拡大しました。「野菜作り」「おはなしの会」双方のバージョンアップにご期待ください。

移住の記ーその4

佐賀県小城（おぎ）市小城町 （県央）前田康行

この日は生涯忘れることはないだろうなあ、なんてその時は強く心に刻み込んでいたはずなのに、今年すっかり忘れてしまっていて、5月2日。愛車で相模原を発って、途中車中泊を繰り返しながら、念願の故郷にやっとたどり着いた記念すべき日だというのに。人間の心なんてあてになりませんですねえまったく。

それはさておき、最期の場所は故郷にしたいとの思いが募り、移住というか故郷へのUターンを決断したのは70歳になる2年ほど前でしょうか。仕事探し、家探しの2年間を経て70歳になったのをきっかけに帰郷を実行した次第です。早いものであれから3年が経ちました。この間、想定外の出来事が起こったりしましてね、必ずしも平穏無事な移住生活とはいきませんでした。そうそういいことばかりではありませんでしたが、まあ人間どこでも生きていけると思っていますから、こんなはずじゃなかった、と後悔することはありませんけどね。ともあれ、石の上にも3年、さすがに落ち着いてきたというか、慣れてきたというか、近頃の心境としては、だいぶ佐賀の人間になってきたなあといったところです。そこへもってきて、70歳過ぎの単身移住者って珍しいのか、最近では、地元の市役所の移住担当部署か

ら取材を受けたり、県庁の移住相談窓口の人が我が家を訪ねてきたりしましてね、ちょっとした話題の人物になったみたいな気分。騒ぎを起こしているわけでもなんでもないんですけど。こちらに来てから、地元のいろんな催しに顔を出してはいろんな人と接することに努めて、それで顔を覚えられたみたい。まあ、なんでも興味があることにはどんどん首を突っ込むつもりでいますから。もう先が長くないんだから、行きたいところに行き、やりたいことをやる、ってのが最近の信条です。

で、今回は有明海に行ってきました。こちらに来て3年も経つのに行ったことなく、今回ふと思い立ちました。小さい頃父親とよく釣りに行ってましたから60年ぶりぐらいでしょうか。そこでの写真を添付しました。携帯のカメラなのでちょっと見にくくて申し訳ないのですが一応映っています。ムツゴロウとシオマネキです。いやあほんと久しぶりに生きたムツゴロウを見て感激しました。相変わらずグロテスク。愛嬌があるといえば聞こえはいいか。5月6日が繁殖期で、この時期の雄は求愛行動でぴょんと飛び跳ねるんです。これがなかなかの見もの。シオマネキは片方の爪がやけに大きいカニで、アカガニって呼んでました。写真では、乾いた泥が付着して白く見えますが全身赤色です。いずれも私が小さい頃馴染んでいた生き物たちです。しかもよく食べてました。ムツゴロウはかば焼きで、シオマネキは塩辛（ガニ漬けと言います）。どちらもたいして美味しいものではないんですが、昔は貧しかったですし、採りに行けばただですから、そういったものでも貴重な食料だったんでしょうね。そういえば佐賀では鮎もよく食べてました。鱗と内臓を取った鮎を昆布で巻いて、大きな鍋に水と水飴と醤油を入れてコトコト一晩ぐらいかけて煮詰めて。これは今食べてもおいしいと思いますよ。ただ、佐賀の若い人に聞いたら、こういった食べ物は知らないそうで、食べたことないということです。郷土の味なのになあ、悲しい限りです。

小さい頃、ガニ漬けやら鮎の煮物やらを作るときには母親によく手伝わされました。だからこれを見ると母親が思い出されるんですよ。そういえば、故郷への思いというものは、究極親への思慕と同じだというだれかの言葉があったような。だから、親がいなくなれば故郷は消え去っていくのかなあ。私の帰郷は、それへのささやかな抵抗なのかもしれません。



(2025年5月13日、上：ムツゴロウ、下：シオマネキ、携帯での撮影なのでちょっと不明瞭なのはご容赦を、拡大していただければ少しは姿かたちが見えるかと、佐賀県小城市芦刈町、海遊ふれあいパーク)



塩むすびの味わい、修学院離宮の秋

多摩・田園 竹内 純一

秋の京都を訪ねる旅で、忘れられない塩むすびに出会った。

私は 2024 年 11 月 15 日、紅葉の季節の始まりに京都の修学院離宮を訪れた。山荘は期待通りに素晴らしかったが、敷地内で稲作が行われていると知って驚いた。

修学院離宮は江戸時代初期、後水尾上皇によって造営された山荘である。京都の北東、比叡山の麓に位置し、丘陵地を活かした見事な建築や調度品、そして景観で知られている。上（かみ）・中（なか）・下（しも）の三つの御茶屋は、周囲の棚田に囲まれるように建てられ、離宮内からは北山や京都市内を一望できる。三つの御茶屋をつなぐ連絡路からは棚田の風景が見える。調べてみると、これらの棚田もまた山荘の一部として、計画的に組み込まれていたようだ。（写真：修学院離宮の棚田風景）

棚田は、第二次大戦後の農地改革によって、いったん民有地となったが、昭和 39 年（1964 年）に国が買い上げ、以後は修学院離宮の一部として宮内庁が維持・管理しているという。考えてみれば、離宮内に近代的なビルが建っては景観が台無しだろう。

地形に合わせて作られた棚田には今も江戸時代の面影が残っているようだ。維持管理は地元の農家に委ねられ、丁寧な耕作が行われているそうだ。



収穫された米は「修学院離宮米」と呼ばれ、地元で流通しているらしい。今回は修学院離宮のすぐそばにある「小林家（こばやしや）」という食堂を訪ねた。小林家は、うどん・そば・丼ものなどを出す家庭的な店で、地元の方や近隣で働く人々、それに観光客が混じって訪れる。私は「しっぽくうどん」と「だし巻き」、そして「おにぎり」を注文した。「おにぎりは修学院離宮米ですか？」と尋ねると、「そうですえ」との返事が返ってきた。



やがて運ばれてきたのは、炊きたてのご飯を手でふっくらと握った塩むすび。口に含むと、温もりとともに、お米本来の甘みがじんわり広がる。おにぎりにして正解だった。（写真：小林家の塩むすび（修学院離宮米使用））

会計の際に、「修学院離宮米は買えますか？」と尋ねたが、販売は地元限定とのこと。宮内庁から委託された農家による生産であり、限られた面積の棚田米なので、広く流通しないのも、なるほどと思えた。

修学院離宮は事前予約制で一般公開されており、宮内庁のサイトから申し込みば、誰でも無料で参観できる。もし修学院離宮を訪れる機会があれば、近く的小林家で、棚田の恵みを塩むすびで味わってみてはいかがだろうか。

じゃお多摩・田園

伝統に汗を流す若者たち ～エイサーを撮る～

5月のグラファーズ撮影会は「フェスタまちだ 2025」へと出かけました。この催しは今年で39回目を迎えるイベントで「エイサーまつり」としても知られています。町田市中央地区商業振興対策協議会が中心になって開催しており、地元のエイサーチーム「町田琉」や「町田青海波」のほか、沖縄や首都圏各地からも多数のエイサー団体が参加し、町田の中心部を舞台に華やかに開催されます。

私たちが訪れたのは5月11日（日）。会場となる原町田大通り沿いの浄運寺交差点周辺には、開始1時間前に到着したものの、すでに観客席は満員状態。どうにか見つけた隙間に身体を滑り込ませましたが、身動きもできないほどの混雑ぶりでした。

いよいよ開演です。舞台に登場したのは、男女4名の歌い手たち。三線（さんしん）の音色と歌声が響きわたり、会場の空気が一変します。最初に登場したのは「桜風エイサー琉球風車」という団体で、町田市を中心に活動しているそうです。独特のリズムに合わせて打ち鳴らされるエイサー太鼓や締め太鼓。力強い男踊りと、しなやかな女踊りの対比も印象的で、その迫力と美しさに圧倒されました。



締め太鼓



女踊り



エイサー太鼓

この日の撮影では、ほかにも「東京中野区新風エイサー」や「町田琉」、「横田西多摩エイサー太鼓」などの演舞を間近に見ることができました。それぞれに異なる衣装や演出があり、同じエイサーでも実に多彩な表現があるのだと知りました。

最近若者に関する暗いニュースを耳にすることも多いですが、伝統芸能に真剣に向き合い、汗を流す若者たちの姿に触れると、日本の未来も捨てたものではないと感じさせられます。写真の被写体としても躍動感にあふれており、若さと生命を感じました。

機会が許すならば、ぜひ来年もカメラを携えてこの熱気を味わいたいと思います。

（ベイサイド 藤井 直敏 記・写真）

輪転機の轟音と繊細な職人技～読売新聞工場見学記～

5月21日（水）、「仲間と街歩き」の行事として、読売新聞の東京北工場を見学しました。参加者は14名。生涯学習と会員同士の交流を目的とした企画です。

読売新聞は全国31か所の工場で印刷されており、首都圏には東京北、江東、府中、横浜の4工場があります。今回訪れた東京北工場は、2003年に設立され、6セット（30台）の高速オフセット輪転機を備え、東京都や埼玉県、千葉県、茨城県などに新聞を届けています。



工場の建物は流線型の屋根を持ち、北側を流れる隅田川からの風が自然に通り返ける設計になっています。（写真上）運営は読売新聞グループの「株式会社読売プリントメディア」です。当日は高度に自動化、省力化が進んだ工場を社員4名の方が、約1時間半にわたって案内してくださいました。

最初に、読売新聞の会社案内やSDGsへの取り組み、印刷の歴史と工場の紹介映像を視聴。その後、「読売新聞歴史資料室」を見学しました。そこには、活版印刷時代の鉛版から現代の刷版、各時代のカメラ、話題となった紙面の展示などが並び、新聞づくりの進化を感じました。



続いて、給紙、製版、印刷、出荷の順で工場内を回りました。重さ1トンもあるロール状の新聞用紙や、デジタルデータから刷版を作るCTP（Computer to Plate）の工程を見学しました。夕刊の印刷現場では、稼働中の輪転機の音の大きさに驚きました。輪転機は自動の品質調整装置を備えているそうですが、機械任せでなく、色味や位置などを人の目で確認し微調整する繊細な職人技に、プロフェッショナルとしてのこだわりを感じました。

現代の新聞はカラー印刷技術も高度で、高級ブランドの広告にも対応できる品質を実現しているとのこと。最後に、刷り上がった新聞を自動で数え、梱包し、販売店へ向けて出荷する「カウンターストッカー」も見学しました。

見学後の質疑応答では、「出来上がった印刷紙面に不良品がないか、厳しいチェックをしています」とのお話が印象に残りました。フェイクニュースや偏った情報が広がりやすい現代。印刷途中であっても、誤りが見つかれば刷り直しも辞さないという姿勢で、正確な情報を届ける努力を続けておられるそうです。工場見学を通じて、丁寧な取材や調査報道など、改めて新聞ならではの価値を感じました。

見学後は、希望者で近くの一軒家レストラン「ア・クール・ジョア」にて昼食としました。おいしいフレンチ料理と少しのお酒をいただきながら、和やかな交流のひとつを過ごしました。

（多摩・田園 竹内 純一 記・写真）